

リアの泉

=(株)北岡組と読む人を結ぶ小冊子=

吉野川と

徳島県美馬市脇町の歴史

吉野川VALLEY

北岡組リニョーアルコンセプトへの繋がり

P2~3

北岡組新社屋紹介

コンセプトに沿った設計で変わった

オフィスと働き方

P4~5

北岡組本社大規模改修

デザインコンセプト

佐藤 航氏

手書きデザイン書きおろし

&

デザインコンセプト(全文)

P6~7



今回の改修によって吹き抜けから自然光が差し込む明るいオフィスへと生まれ変わった北岡組本社



▲古くは吉野川を行き交う平田舟が物流を支えていた

吉野川と 徳島県美馬市脇町の歴史に触れる

北岡組大規模改修のコンセプトづくりに反映
—吉野川Valleyとの繋がり—
—地域特性との融合—

「リアの泉」第2号にあたっては、私たちの郷土脇町の歴史的背景と徳島の勃興についてすこし触れてみたいと思います。

【要衝としての脇町】

脇町は吉野川中流北岸に位置し、古くから讃州・予州への商品流通の要衝として発展を遂げてきたようです。長宗我部の阿波侵攻によって一時荒廃したとされています。その後蜂須賀の阿波入部によって支城下町・郷町として再興が許可され、江戸後期まで「藍」を中心に発展を遂げてきました。そこには蜂須賀の客将であり阿波脇城番の家老として移ってきた稲田家の存在が大きく寄与していたようです。稲田家の統治のもとに「藍」と「うだつ」の町・脇町が明治初期まで栄えていきました。

【阿波藍について】

もともと「藍」は連作が難しく、「暴れ川・四国三郎吉野川」の度々の洪水による肥沃な大地が「藍」の生産を可能にできました。脇町対岸の「舞中島」含め広大な農地が一大生産地として「藍」が栽培されるようになり、稲田家の楽市楽座や「藍」の奨励もあり、いきおい豪商として「藍商」が勃興し稲田家や徳島藩に富をもたらすことになっていったようです。一万四千石の稲田家は、実際は三万石ほどに相当する豊かな藩財政を誇っていたとも言われています。藍商たちはこぞつて藍蔵を作り耐火の為の防火壁「うだつ」を屋根に取り付けました。ここに「甲斐性の無い様としての（うだつが上がない）」という言い回しが生まれてきたよう



▲現在の吉野川（脇町猪尻近辺）

です。以来「藍」の生産は阿波の国との評価を得て、明治初期には英国化学者アトギンソンが江戸の町人の衣の美しい「藍色」をみて感動し「ジャパンブルー」と呼んだことは有名であります。

【稲田家と猪尻侍】

尾張由来の稲田家が、僅かな直系の家来を連れてきて要衝の脇城に入城し讃州・予州の外庄から領地を守る為には、土地の力のある庄屋や本百姓などの縁者から冥加銀の寄付を受け家臣に取り立て彼等との縁を深め、かつ家臣の数も増やしていく施政をおこなっていたようです。そして、旧来の武士と分け隔てなく扱い適材適所の配置をしていたようです。彼等を総称して屋敷や会所があった猪尻村にちなみ「猪尻侍」と呼ばれていたようであり、一説にはその7割以上が元百姓由来の家臣であったようです。

【庚午事変の背景】

その後、「大阪夏の陣」の功績で淡路が蜂須賀に増されたのを機に、稲田家は淡路に移ることを命じられても「猪尻侍」は脇町に残り、洲本の家臣団いわゆる「洲本派」とは一線を画した存在となっていたようです。有能な者たちはともに志士として活躍し、明治維新の折も稲田家臣団は「尊王攘夷」を主張し、「佐幕派」の藩主・蜂須賀家臣団とは確執を繰り返し、とうとう「庚午事変」によって蜂須賀家臣団の攻撃により

「洲本派」は一掃され「稲田侍」も讃岐に逃走する結末になったようです。その後の明治政府の裁断で「淡路島は兵庫に」移管されて、稲田家臣団は「北海道静内に開拓の命」に服すようになりました。小説「お登勢」や映画「北の零年」にはそれら



▲昔の活況がしのばれる「藍商」の古民家



▲稲田植元
(蜂須賀正勝と義兄弟の契りを結んだ)

【北岡組リニューアルのコンセプト】さて、今回、(株)北岡組は本社大規模リニューアルにあたり、その設計を「未来コンビニ」で各種のデザイン賞を総なめにした佐藤航氏に委託するこ

の背景が細かく描写されているようです。脇町とその背景を語るときに「藍」「うだつ」「稲田家」「猪尻侍」は欠くことのできない要素となっています。



▲照明に映し出されたうだつの通り

とになりました。(株)北岡組からは『会社が今後目指すべき「働き方改革」と「時代」に先駆けた空間作りと地域特性との融合』を設計に体現して欲しい』との要望を出させていただきました。結論から申しますと佐藤航氏にはわがままな要求をすべて満たしていただきました。【吉野川＜NICE＞のコンセプトのもと「暴れ川・四国三郎吉野川」と地域とのかかわりをふんだんに取り入れてくださり、また「緑と吹き抜けでの最適空間の追及」も両立していただき、大変に感謝しております。ちなみに(株)北岡組社長夫人の実家三宅家は「稲田家臣」の末裔であり、夫人の高祖父・武十郎(生家は佐藤家)は、「猪尻侍」で勤王の志士の竹沢家(寛三郎の生家)や南家薫風の生家)とは親戚関係で交流があったようです。後代(郡付浪人三宅武十郎の頃)には「藍商」の鑑札も得て

▶三宅家で大切に保管されていた「藍商免許鑑札」。阿波国美馬郡拝原村三宅武十郎が明治九年十月二十二日に提出し、高知県徳島支庁から営業許可を受けた。当時は高知県であったことを物語る貴重な資料でもある。徳島県の古文書館に寄贈。



藍商免許鑑札

拝原地区の河岸の土地で「藍」の生産にも携わっていたようです。因縁を感じずにはいられません。



▲現存する稲田西屋敷の門
(脇町猪尻)



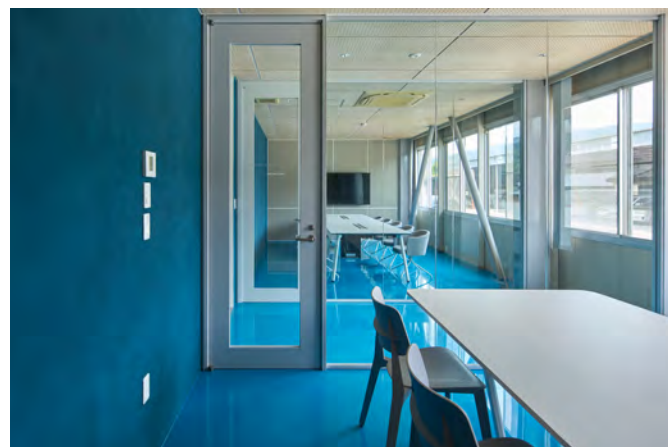
2階の照明は大小様々なダウンライトがランダムにちりばめられている。夜に照明をつけると、吉野川の上を流れる星空のように輝く。

北岡組 新社屋

コンセプトに沿った設計で変わった オフィスと働き方



キッズスペース・キッチンが設けられた1階。
台風で休校になったときに子供を連れて出社できた等、
子育て中の社員の働きやすさに繋がっている。



特産品の藍色を使って
吉野川を表現したミーティングルーム。



高さ7mを超えるベンジャミンのシンボルツリーがそびえ立ち、トップライトから自然光が注ぎ込む。自然光や風、植物が屋外から屋内に入り込み屋内はまるで外にいるような気持ちよさで、自然と明るく爽やかな気分になる。



エントランスの前庭には最先端技術を使ったオブジェを設置。紅葉の樹木を3Dスキャンし、その枝ぶりを縫うように3Dモデリングし、精度高くコンクリートの3Dプリンターでアウトプットして作っている。
(Polyuse社の技術)

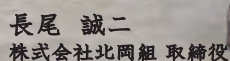
新たなオフィスでは自席を持たず多種多様な働き方を自由に選べるActive Based workingを実践。最適な場所を選んで働くことができる。



吹き抜けを通して常に社員同士がお互いを身近に感じられる。今まで話す機会のなかった違う部署の人とも自然と会話するように。



佐藤 航



佐藤 航
WATARU ARCHITECTS 代表

大岡 航
株式会社Polyuse 代表

シンボルツリーを囲んでの記念撮影

創業80年以上を誇る北岡組は目指すべき「働き方改革」と「時代に先駆けた働き方と地域特性との融合」を体現し、本社の大規模改修に踏み切った。社内の企業風土を一変し新しい企業文化を創り出そうという挑戦的なプロジェクトである。

コンセプトは吉野川VALLEY。吉野川は古くから徳島の自然、文化、産業を生み出し人々の暮らしを支えている。本社はこの吉野川と丁度同じ軸線上に東西に延びることから、既存のエントランスを軸に本社を南北方向に細長く二つに分棟することを考えた。具体的には1・2階を吹き抜けでつなげることで社員同士のコミュニケーションや交流を促進し、屋根にスリット上のトップライトを東西貫いて設けることで自然の光や風が注ぎ込む豊かな働く環境を作り、さらに正面ファサードも2つに分割し外に開くことで周辺地域からのヒト、モノ、情報が建物に流れ込み、地域との交流を作るきっかけを作った。

既存のオフィスは個人の机を島型状につなげた昔ながらの環境で部門ごとに上下階に分かれて働いた。また部門ごとの壁で閉ざされた空間は暗い印象で、明るい環境で部門間を横断した活発なコミュニケーションが自然に起こるオフィスへ変える経営課題があった。そこで北岡組は空間のハードの刷新に加えて働き方のソフト部分においてもメスを入れ、変革に踏み切った。新たなオフィスでは自席を

持たず多種多様な働き方を活動に合わせ自由に選べるActive Based Workingを実践している。そのため社員は業務の内容に沿ってコミュニケーション中心であればファミレス席で、チームでの集中作業であれば大テーブルで、個人作業をリラックスして行う場合はカフェ席を利用するなど最適な場所を選んで働くことができる。

自席を持たないため移動しながら働くことが日常となり、自然と部門間での交流が深まることにつながった。さらに吉野川VALLEYの特徴でもある吹き抜けを通して常に社員同士がお互いを常に身近に感じる風通しの良いオフィスとなった。そのため社員の服装や持ち物も自然と変わり、社員同士が良い距離感で影響を与えながら仕事ができる環境となった。自席に縛られない働き方を実践するため、ペーパーレスに取り組み用品を1人1台支給するなどソフト面やデバイス面でも刷新を行った。さらにこのオフィスでは家族とともに働けることも特徴の一つだ。アフターコロナ以降ではworkからliveへシームレスにつながった働き方がより一層求められると考えるが、この流れを先行して取り組んだ形だ。二階は社員以外も利用できる公園のようなブリックの場が広がりキッズスペースやキッチンなど家の要素が設けられている。子供たちはお父さんやお母さんのそばで宿題をしたり、知育玩具で楽しんだりオフィスを家のように利用でき、

親は子供の近くで安心して働くことができる。また1階の什器はフレキシブルに移動・組み替え可能で多目的に使えるスペースになっていることから、家族を交えた社員イベントや地域イベントでも活用することができると。このように吉野川VALLEYのコンセプトから旧来の働き方を脱ぎ、社員・家族・地域を巻き込んだ新たな働き方が実践されている。

続いて吉野川VALLEYの空間的な特徴について紹介する。エントランスへのアプローチは公園のような場所をイメージしており地上からエントランスの大庇の上まで植栽が立体的に広がって地域にグリーンを開放している。この4mものキャンチレバーがかかる大庇では、庇下に植栽が彩り日差しを遮る憩いの場所を作り、庇上には豊かな植栽が広がる空中庭園として馬市の景色を一望できる。エントランスの前庭には最先端技術を使い紅葉の樹木と一体となったコンクリートの3Dプリンターがオブジェとして出迎える。3つに分かれた花瓶のような形状でこれは紅葉の樹木を3Dスキャンし、その枝ぶりを縫うように3Dモデリングし、精度高くコンクリートの3Dプリンターでアウトプットして作っている。エントランスに入ると高さ7mを超えるベンジャミンのシンボルツリーがそびえ立ち、東西に流れる吉野川VALLEYと共に屋外の自然を力強く屋内に引き込む。トップライトからは自然光が注ぎ込み、昼間は照明の光を全て消して自然光のみで働くことができる。また東西に自然の風がそよぐことから、四季の中間期では

空調を切り通風のみで十分快適に過ごすことができる。そのため吉野川VALLEYに沿って自然光や風、植物が屋外から屋内に入り込み、屋内はまるで外にいるような気持ち良さで働くことができる。1階は天井を落としスケルトン天井としているため、天井が高く吹き抜けを通して太陽光が床まで落ちることから光あふれる渓谷のようなイメージを作り出している。2階の照明は大小様々なダウンライトがランダムにちりばめられ、夜に照明をつけると、吉野川の上を流れる星空のように輝き、昼とは異なる夜の艶っぽい空間を演出する。屋内のインテリアは既存建築の materially 新たな素材を等価に扱い、ミックスすることに力点を置いている。1・2階の床は既存のタイル跡の残る味わい深い素材で1階の天井は特徴的な既存の赤い錆止め塗装がある。これらの素材感を活かすためシンプルな合板を新たなマテリアルとして使用し、1・2階に異なる印象の空間を展開した。具体的には二階には壁と個室の天井にシナ合板を用いて既存の特徴的な素材感や色味を活かしながらも明るく爽やかイメージに仕上げている。2階はスモークキーに染色したラワン合板を用いてラウンジのような落ち着いた雰囲気のある空間を作っている。さらに会議室などの個室には、吉野川を地域の特産である藍色を使って表現した部屋や、紙管を連続することでうだつの町並みを表現した応接室など、地域の特徴をデザインに取り入れた。

空間を切り通風のみで十分快適に過ごすことができる。そのため吉野川VALLEYに沿って自然光や風、植物が屋外から屋内に入り込み、屋内はまるで外にいるような気持ち良さで働くことができる。1階は天井を落としスケルトン天井としているため、天井が高く吹き抜けを通して太陽光が床まで落ちることから光あふれる渓谷のようなイメージを作り出している。2階の照明は大小様々なダウンライトがランダムにちりばめられ、夜に照明をつけると、吉野川の上を流れる星空のように輝き、昼とは異なる夜の艶っぽい空間を演出する。屋内のインテリアは既存建築の materially 新たな素材を等価に扱い、ミックスすることに力点を置いている。1・2階の床は既存のタイル跡の残る味わい深い素材で1階の天井は特徴的な既存の赤い錆止め塗装がある。これらの素材感を活かすためシンプルな合板を新たなマテリアルとして使用し、1・2階に異なる印象の空間を展開した。具体的には二階には壁と個室の天井にシナ合板を用いて既存の特徴的な素材感や色味を活かしながらも明るく爽やかイメージに仕上げている。2階はスモークキーに染色したラワン合板を用いてラウンジのような落ち着いた雰囲気のある空間を作っている。さらに会議室などの個室には、吉野川を地域の特産である藍色を使って表現した部屋や、紙管を連続することでうだつの町並みを表現した応接室など、地域の特徴をデザインに取り入れた。

